

Title	タガログ語の可能表現：意味論的・語用論的視点からの形式・意味・用法の分析
Author(s)	大上, 正直
Citation	大阪外国語大学論集. 30 p.51-p.71
Issue Date	2004-02-27
oaire:version	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/79933
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

タガログ語の可能表現 —意味論的・語用論的視点からの形式・意味・用法の分析—

大 上 正 直

Tagalog Potential Expressions : An Analysis of the Forms, Meanings and Usages from Semantic and Pragmatical Viewpoints

OUE Masanao

This paper analyzes the meanings and usages of Tagalog potential expressions which can be divided into two types of expressive forms namely: 1) Type I: the one using the pseudo-verbs (modal verbs) like “Puwede/Maaari” and 2) Type II: the potential (potentive) verbs prefixed with “Maka-/Ma-”, within a comprehensive framework for the formulation of the whole potential formal system, which the author proposes after the examination of the expressions concerned, considering both semantic and pragmatical meanings. And based on the result of the said analysis, it also tries to resolve the following questions:

- a) the mechanism of the possible interchangeability among those pseudo-verbs, and between each expressive form of the Type I and the Type II (Maka-/Ma- verbs).
- b) the semantic and aspectual differences between the “inherent/permanent/prolonged/repetitive” and “temporary” disability which can be shown in the negative sentences with Maka-/Ma- verbs.

0. はじめに

タガログ語の可能表現には、大きく分けて2つの形式がある。1つは、Puwede/Maaariに代表される擬似動詞（本動詞に前置し、助動詞的な役割を果たしたり、単独で形容詞的に用いられたりするもので、いわゆる法助動詞（Modals）に相当する）等を用いる形式（以下、「第1形式」と呼ぶ）で、もう1つは、動詞形成接辞（接頭辞）であるMaka-（行為者焦点動詞の語頭に付加）あるいはMa-（非行為者焦点動詞の語頭に付加）を用いる形式（以下、Maka-/Ma- 動詞と示し、「第2形式」と呼ぶ）である。従来の研究（主要文法概説書）では、第1形式あるいは第2形式について限られた形でしか説明や記述がなされておらず、ましてや双方の形式を一まとめにしてその意味や用法を網羅的かつ体系的に整理し説明を加えたものは見られない。このようなことから、可能表現は、研究者のみならず、外国人学習者をしてその意味の捉え方や用法において少なからずの揺れを生じせしめている文法事項となっていることも事実である。

そこで、本稿では、これらの可能表現について、第1章で先行研究を概観し、次いで第2章で意味論的な視点から、双方の形式に現れる意味を、根源的なものにとどまらず、語用論的なものまで視野に入れて分類し、かつその用法を整理・分析した上で、第3章で新たな包括的枠組みを提示したい。そして、第4章では以上の分析結果を踏まえて、話者が実際に可能表現を用いる際の第1形式間あるいは双方の形式間の交替のメカニズムの解明を試みるとともに、これまで議論されることのなかった第2形式の否定表現における、アスペクト要素をもった「恒常的不能／一時的不能」を表す構文の使い分けの必要性についても主張したいと考える。

1. 先行研究

先行研究（主要文法概説書）においては、「可能」という表現領域を、1つの大きな枠組で捉えた上で、筆者の言うところの第1形式および第2形式の両形式に現れる意味や用法についての包括的な説明を行ったものは見られないが、本章ではいずれかの形式に関する記述を整理し、概観する。

1.1. Bloomfield (1917)

1.1.1. 第1形式

Puwede についての記述は見られないが、Marunong（下記 (i) は古い綴り）、Maaari および Kaya については次のとおりである。

- (i) marunong : wise, knowing how
- (ii) alam : know
- (iii) maari : be possible, maaari : will be possible
- (iv) kaya : ability, means

(Bloomfield 1917:196,325,357)

1.1.2. 第2形式

能動と受動という用語を用いて Maka-/Ma- 動詞について次のように説明している。¹⁾

- (i) The active may denote an animate actor who is able, succeeds in doing so and so.
(能動は、能力を有し、何かをうまくやりぬく行為者（有情物）を表す。)
- (ii) mostly with the particle *na*, expressing the actor of a completed action. (主として小辞 *na* を伴って、完遂された行為の行為者を示す。)
- (iii) The direct passive may denote the object directly affected by an action which an actor is able to perform. (直接受動は行為者が遂行可能な行為により直接影響を受ける対象を示す。)
- (iv) The direct passive may denote an object directly affected by an action which has

been (successfully) completed by an actor. (直接受動は成功裏に完遂された行為によって直接影響を受けた対象を示す。)

(ibid.: 280-284)

1.2. Blake (1925)

1.2.1. 第1形式

Kaya についての記述はないが、その他の擬似動詞については次のとおりである。
現代的な用法の Puwede や Maaari の記述はない。代わりに Mangyari²⁾ (be able) 「できる」
との記述がある。

(i) Marunong/Maalam ³⁾ : knowing how

(Blake 1925: 155)

1.2.2. 第2形式

Potential verbs are..., signifying 'to be able to do what the root indicates' ..., indicating involuntary actions of the mind or sense ..., indicating the point of completion of an action. (可能動詞は、語根の示す意味のことができること、(中略) 心や感情のもたらす非意図的 (不随意的) な行為、(中略) 行為の完了した時点を示す。)

(ibid.:261-262)

1.3. Bowen (1965)

1.3.1. 第1形式

関連した記述は見られない。

1.3.2. 第2形式

(i) ability, as in Nakakakilala sila ng mahalaga. 'They (show that they) can recognize what's valuable' (能力: 「彼らは重要なことを認識できる・知っている」に見られるとおり。)

(ii) opportunity, as in Nakakapagpasyal ang mga lalaki 'The men get to pay calls.' (機会: 「男たちは、人を訪ねて (遊びに) 行ける」に見られるとおり。)

(iii) permission, as in Nakakapangalakal ba ang mga Amerikano sa Pilipinas?
'Are Americans allowed to go into business in the Philippines?' (許可: 「アメリカ人は、フィリピンでビジネスをしてもいいの?」に見られるとおり。)

(Bowen1965:158)

1.4. Schacter and Otnes (1972) (以下、タイトルの頭文字を用いて「TRG」と略す)

1.4.1. 第1形式

Marunong および Kaya についての記述はないが, Maaari/Puwede については, 次のとおりである。

Maaari/Puwede, which both denote ability, permission, or possibility, are synonymous in all their occurrence. Maaari is common in both informal and formal contexts; puwede is common only in formal contexts. ..., are also used as unaffixed adjectives. (Maaari および Puwede の双方とも「能力」「許可」「可能性」を表し, 生起するすべてのケースにおいて同義である。前者が, フォーマル・インフォーマルのいずれの文脈においても一般的に用いられるのに対して, 後者はインフォーマルな文脈においてのみ使用される。(中略) またそれぞれ, 接辞なしの形容詞としても用いられる。)

(Schacter and Otnes 1972 : 261)

1.4.2. 第2形式

Maka-/Ma- 動詞については, 以下のとおり記述されており, 用例の英訳には, それぞれ「～ができる・たまたま～する」(be able to / happen to) が付されている。

- (i) Derived verbs formed with the prefixes maka-/ma-..., express meanings that include the meanings of ability and/or involuntary action. (接頭辞 Maka-/Ma- のついた派生動詞は, 能力かつ／あるいは非意図的 (不随意的) な行為を含めた意味を表す。)
- (ii) Ability verbs are usually translated by the English equivalent of the underlying verb preceded by a form of 'be able to' or 'can/could.' Perfect - aspect ability verbs are, however, often better translated by English verbs preceded by 'got to' or 'manage to', since the Tagalog verb in these cases denotes that the ability to perform the action has been demonstrated, and that the action has actually been performed. (能力 (可能) 動詞は, 通常, 「できる・できた」という形式を前置させた英語の基底動詞相当の表現に翻訳される。しかしながら, 一方で, 完了 (相) の能力 (可能) 動詞は, “be able to” や “can / could” よりむしろ “got to” や “managed to” を前置させた英語の動詞を使った訳の方が, たいいていより馴染む。なぜなら, このような場合のタガログ語動詞は, 行為を遂行する能力が示されたことや, 行為が実際に遂行されたことを意味するからである。)

(ibid.: 330-332)

2. 双方の表現形式の意味と用法

次に、第1形式および第2形式の意味と用法について考察する。Marunong/Alam は、いずれの先行研究においても「可能」という枠組みの中で議論がなされてこなかったが、後ろに動詞を従えて、「基本的な技能等の会得」を示す重要な形容詞類（擬似動詞）であることに鑑み、本研究では考察対象に新たに含め、可能表現の枠組み（(41) 参照）の一角を担うものとして位置付ける。また、(5) のように、いずれの擬似動詞も、形容詞としての機能をも併せ持つ性質上、動詞を従えなくても表現可能であるが、意味を分類する上では、特に支障はないので、本稿では動詞を従えるもののみを扱うこととする。さらに、本稿における「意味」とは「ある行為が実現可能となるための諸条件・制約等」を指しており、それらと読み替えが可能である。これらの分類に際しては、英語、日本語等に関する研究の結果得られた知見、特に Palmer (1979), Coates (1983), Bolinger (1989), 渋谷 (1993) 等を参考にした。

なお、本研究における用例は基本的に筆者による作例であるが、容認度の判断は、筆者が尋ねた2人のフィリピン人インフォーマントによる。

- (5) Marunong siya ng Tagalog.
(彼はタガログ語ができる)

2.1. 「擬似動詞等＋動詞不定相」型（第1形式）

2.1.1. Marunong/Alam

Marunong は、Alam と交替可能であるが、「基本的な技能・知識等の会得」という意味で使用する場合には、前者の方が一般的である。

2.1.1.1. 形式

- (i) 「Marunong + (リンカー) + 行為者焦点動詞不定相 + 主格 (ANG 形行為者)」
(行為者が人称代名詞の場合は、前接語である性格上、Marunong に後置する)
(ii) 「Alam + 属格 (NG 形行為者) + リンカー + 行為者焦点動詞不定相」

2.1.1.2. 意味

- (i) 基本技能：「訓練、学習等を通じて、基本的な知識・技能・作法等を会得している」

- (6) a. Marunong akong lumangoy.
b. Alam niyang lumangoy.
(私は泳げる)

2.1.2. Puwede/Maaari

Puwede は、スペイン語の「可能」「許可」「依頼」等を表す動詞 Poder からの借用語で、Maaari と置き換えが可能である。前者の方がより口語的であり、かつ頻度も高いことに鑑み、本稿における用例は、便宜的に Puwede に統一する。

2.1.2.1. 形式

- (i)「Puwede + リンカー + 行為者焦点動詞不定相 + 主格 (ANG 形行為者)」
- (ii)「Puwede + リンカー + 非行為者焦点動詞不定相 + 属格 (NG 形行為者) + 主格 (非行為者)」(行為者が人称代名詞の場合は、前接語である性格上、Puwede に後置する)

2.1.2.2. 意味

- (i)可能性:「～の可能性がある、あり得る」

(7) Puwedeng nagnakaw ng pera si Maria doon.

(マリアはあそこでお金を盗んだ可能性はある)

寺村 (1982) によると、(7) のような「あることが起こる、あるいはある可能性はある」という「可能性」の表現は、英語では可能表現に含めても、日本語ではそうしないようである。つまり、「可能」とは「何々しようと思えば、その実現についてさまたげるものはない」というのが中心的な意味であるからのようである。しかしながら、一方で、Puwede は、英語の Can のみならず May に相当する意味も併せ持っており、(7) は、モダリティのレベルの「可能性」を表し、Palmer (1979) の言う認識的可能性 (epistemic possibility) を示すものである。すなわち、この場合、「マリアは、あそこでお金を盗んだ」という命題に対する話者の判断を示すものと捉えることが可能であり、可能表現の一部とみなすことが妥当であろう。よって、ここに取り上げるが、以下 (v) の状況 (可能) とは区別して分類した。

- (ii)基本技能

(8) のような Puwede を使った例文は、少なからずのタガログ語教材で紹介されている。非文ではないが、(6ab) の Marunong に比べて相対的に自然さを欠いており、これだけでは基本技能を示しているか否か即断できない。

(8) Puwede akong lumangoy.

(私は泳げる)

- (iii)精神的 (心情的・生理的)・肉体的・金銭的能力等

(21) の Kaya の方がより自然であるが、Puwede でも適格文になる。

(9) Puwede kong gawin iyan.

(私はそれができる)

- (iv)属性・特質

対象が一時的ではなく、ほぼ恒常的にこのような性質を有する場合の用法である。ここで使用される動詞は、通常、非情物の属性を示す性格上、(10) の inumin (-IN 動詞。語根: inom) のように対象焦点のものが多く見られる。

(10) Puwedeng inumin ang tubig dito.

(この水は飲める)

- (v)状況 (可能)

外的状況 (外的条件) と内的状況 (内的条件)⁴⁾ の二つのケースがあり、通常、いずれかに分類できる。ただし、場合によっては、双方の要素を併せ持ついわゆる「融合型」にな

ることもある。換言すれば、行為者が潜在的に有する能力を発動し、行為を実行することが状況的に可能であったり、また逆のケースも然りということである。その場合、行為の主体から見ると内外双方の条件・制約が絡んでくるが、「能力」および「状況」のうちのいずれの要因が、度合いの問題として相対的に優位であるかは文脈から判断せざるを得ないであろう。

(11) Puwede na akong umuwi dahil tumigil na ang ulan.

(雨が止んだから、私はもう帰れる)

(12) Hindi ko kayo puwedeng samahan dahil masakit ang ulo ko.

(頭が痛いので、私は君たちに同行できない)

なお、(13)～(19)は、主として「状況」、場合によっては「能力」、あるいは同時に双方の根源的な意味から派生している、いわゆる含意あるいは効力を示す語用論的な用法である。つまり、これらは、「可能」の根源的な意味から二次的に発生したいわゆる派生的要因(57)参照)であるが、ここに一緒にまとめておくこととする。日本語訳には「～できる」という訳は付されていないが、そのように置換えて訳しても何ら違和感がないのは、それぞれ主として「状況」(場合によっては「能力」)という基本的要因が根底に存在するからであろう。

(vi) 許可 (社会規範, 規則, 資格, 私的許可, 権威者による指示・命令等) (語用論的用法)

(13) Puwede ka nang umuwi kung gusto mo. (「上司の指示」)

(帰りたかったら、もうそうしていいよ)

この場合、第2人称が主格になる文になっており、「穏やかで丁寧な命令文」というふうに言うことも可能であろう。

(14) Hindi puwedeng manigarilyo dito. (「規則」)

(ここでタバコを吸ってはいけない)

(15) Hindi ako puwedeng uminom dahil sabi ng doktor. (「医師の指示」)

(私は医者 of 指示で禁酒である)

(vii) 依頼 (語用論的用法)

英語の “May I ~ ?” 「～してもいいですか？」に相当する表現である。

(16) Puwede (ko) bang hiram ang libro mo? (「状況」)

(その君の本を借りてもいい?)

(viii) 奨励 (語用論的用法)

(17) Puwede kang kumuha ng Bar exams. (主として「能力」)

(司法試験を受けてみるといいよ)

この場合、「状況的要因」も考慮する必要があるが、話し手の聞き手に対する奨励は、主として「聞き手の能力」を前提にしているものであると考えられる。

(ix) 申し出 (語用論的用法)

(18) Puwede kitang turuan ng Ingles. (「能力」 + 「時間的余裕等の状況」)

(君に英語を教えてあげてもいいよ)

(19) Puwede nating gawin iyon mamaya. (「状況」)

(それを後でもいいね)

2.1.3. Kaya

2.1.3.1. 形式

(i) 「KAYA + リンカー + 動詞不定相 + 属格 (NG 形行為者)」

2.1.3.2. 意味

基本的な意味は、「能力」である。

(i) 基本技能

(20) は、非文ではないが、(6ab) に比べて相対的にやや自然さに欠ける。

(20) Kaya kong lumangoy.

(私は泳げる)

(ii) 精神的 (心情的・生理的)・肉体的・金銭的能力等

(21) ～ (23) は、いずれも Kaya が本来的に持っている意味がよく現れた自然な文である。

(21) Kaya kong tiisin iyan dahil malakas ako.

(私は精神的に強いのでそれに絶えられる)

(22) Kaya kong buhatin ito dahil malakas ako.

(私は肉体的に強いのでこれが持ち上げられる)

(23) Kaya kong bumili ng bahay dahil may pera ako.

(私は財力があるので家が買える)

(20) のとおり、Kaya も、「基本的知識・技能の会得」を表すことが可能であるが、特に、(24a) のように、話題が「1000 メートル泳げる」という技能の到達度 (達成度)・レベルの問題に至った場合には、「技能」から一歩進んで「達成能力」を表すことになるので、(24b) のような Marunong ではなく、この擬似動詞が優先的に使用される。英語では、いずれの場合も Can で表現できるが、タガログ語の場合は、このように擬似動詞の使い分けが必要になってくる。

(24)a. Kayang lumangoy ni Ben nang 1000 metro.

b. *Marunong lumangoy si Ben nang 1000 metro.

2.2. Maka-/Ma- 動詞型 (第2形式)

Maka-/Ma- 動詞 (活用は (57) 参照) は、TRG で「能力 (可能)・非意図的 (不随意的) 行為動詞」(Ability and Involuntary Action Verb) と呼ばれているものである。この第2形式において動詞のアスペクトが完了相の場合は、いわゆる「実現系の可能」を表す。

2.2.1. 形式

(i) 「Maka- (行為者焦点動詞) + 主格 (ANG 形行為者)」

(ii)「Ma-（非行為者焦点動詞）＋属格（NG 形行為者）＋主格（非行為者）」

2.2.2. 意味

接頭辞 Maka-/Ma- が「可能」との関連でもつ意味としては、以下のものがある。この接辞はこれら以外にも、「おのずと、思わず、偶然、つい、うっかり」といった「自発・不随意」などの意味を併せ持っているが、「可能」と「自発・不随意」などとの関係を明らかにしないまま、これらについて論じることは適切でないので、本研究の考察対象から除外する。

(i) 先天的能力

第1形式についての議論には出てこなかった、「先天的な能力」に関わる表現、たとえば「目が見える」「耳が聞こえる」「歩ける」等については、第2形式でないと表現しきれない面があるので、ここでこの項目をたてる。もっとも、(25bc)のように、第2形式の Maka-/Ma- との共起という形にすれば表現できなくもないが、その場合でも依然として不自然さは拭えない。

(25) a. Hindi siya nakakakita.

b. ?Hindi siya puwedeng makakita.

c. ?Hindi niya kayang makakita.

（彼は目が見えない）

(ii) 基本技能

(26) Nakakapagsalita siya ng Ingles.

（彼は英語がしゃべれる）

(iii) 精神的（心情的・生理的）・肉体的・金銭的能力等

(27) Matitiis ko iyan dahil malakas ako.

（私は精神的に強いのでそれに絶えられるであろう）

(28) Mabubuhay ko ito dahil malakas ako.

（私は肉体的に強いのでこれが持ち上げられるであろう）

(29) Makakabili ako ng bahay dahil may pera ako.

（私は財力があるので家が買えるであろう）

(iv) 属性

対象の属性を表すので、通常、行為者焦点接辞 Maka- ではなく、対象焦点接辞 Ma- の形態をとる。(30)では、Ma- + 語根 (kain) の未完了相が使われている。これは、いわゆる「受動」の機能を持ち、(10)とも共通する面がある。

(30) Hindi nakakain ang mga talaba dito.

（この牡蠣は食べられない）

(v) 状況（可能）

(31) Makakarating ako nang maaga dahil hindi matrapik.

（交通渋滞がないので、私は早く着けるであろう）

(32) Hindi ako makalabas ngayon dahil may sakit ako.

(私は、病気なので今は外出できない)

(vi) 許可 (語用論的用法)

(33) Sabi sa akin ng boss ko na makakauwi na raw ako ng probinsya.

(ボスは私にもう田舎に帰ってもいいと言った)

(vii) 完了

「能力」「状況」のいずれの文脈でも生起する。うまく（どうにかこうにか）行為を完了したというニュアンスがある。想定していた行為の完了を意味するので、当然、動詞のアスペクトは完了相になる。なお、その際、小辞 Na (「すでに」) を伴うことが多い。

(34) Natapos ko na ang trabaho.

(私はその仕事をもうやり終えた)

(viii) 経験

日本語でいう「～したことがある」「すでに～している」に相当する。当然のことながら、動詞のアスペクトは完了相である。(vii) と同様に、小辞 Na を伴うことが多い。

(35) Nakapunta na ako sa Amerika.

(私はアメリカに行ったことがある)

2.2.3. 否定文における「恒常的不能 / 一時的不能」の区別

ここで、筆者が主張したいのは、Maka-/Ma- 動詞が、とくに否定表現において、(38a) のような「ほぼ恒常的な不能」あるいは(38b)のような「一時的な不能」を表すので、使い分けが必要であるという点である。この主としてアスペクトの違いに起因する意味の差異については、先行研究において触れられていない。

2.2.3.1. 形式と意味

(i) 「Hindi + Maka-/Ma- 動詞未完了相 (継続相)」: 恒常的あるいはある程度長い期間 (時間) にわたる不能状態

(ii) 「Hindi + Maka-/Ma- 動詞不定相 (中立相)」: 一時的な不能状態

(36ab) および(37ab)のように、Maka-/Ma- 動詞を伴う否定表現においては、アスペクト (相) が交替することに伴い、ニュアンスの違いが出てくる。TRG によれば、この交替が自由であるとされているが、実際はそうではなく、適切な使い分けが求められる。たとえば、(36a)は、子どもが(しゃべりたいという意志をもって)長期にわたりしゃべれない状態にあるのに対して、(36b)は、一時的にそのような状態に陥っていることを示している。一方、(37ab)についても、前者がほぼ恒常的に薬が飲めないのに対して、後者は一時的に薬が飲めないという状態を示しており、両者の違いは(36ab)の場合と同様である。

(36) a. Hindi nakakapagsalita ang bata. (行為者焦点: 未完了相)

b. Hindi makapagsalita ang bata. (行為者焦点: 不定相)

(その子は物が言えない)

(37) a. Hindi naiinom ng bata ang gamot. (対象焦点：未完了相)

b. Hindi mainom ng bata ang gamot. (対象焦点：不定相)

(その子は、その薬が飲めない)

(Schacter and Otnes 1972: 519)

次に、この違いを上のようないわゆる意志（随意）動詞ではなく、「非意図的（不随意的）」な意味をもつといわれている「見る・見える」という動詞を伴う用例で考察する。(38a)のように未完了相の場合は、(36a) (37a)と同じように先天的あるいはほぼ恒常的に見えない状態にあることを意味するのに対し、(38b)のように不定相の場合は、(36b) ((37b)と同様に一時的に不能の状態にあることを示している。つまり、突然の停電などで急に何も見えなくなった時などは、(38a)ではなく(38b)の方を選択する必要があるということである。

(38) a. Hindi ako nakakakita. : (行為者焦点：未完了相)

(目が見えない)

b. Hindi ako makakita. : (行為者焦点：不定相)

(目が見えない)

タガログ語のいわゆる「叙述文」(描写文)の否定表現において、可能動詞が生起しない構文は、動詞の相が、(39)のように、未完了相（継続相）でなければならず、(40)のように不定相を用いると非文になる。しかしながら、一方で、上で考察したように、可能表現の場合は、不定相でも適格文になり、容認される。それは、「一時的な不能状態」がある行為が開始されてもいない終了してもいないという中立的なアスペクトの側面を持っているからであろう。換言すれば、この場合、「動作・行為」という側面よりも、話し手の発話時におけるどうしようもないいわゆる「不能の状態」という局面の方が優位であるということであろう。

(39) Hindi nagluluto si Maria.

(マリアは料理しない：未完了相)

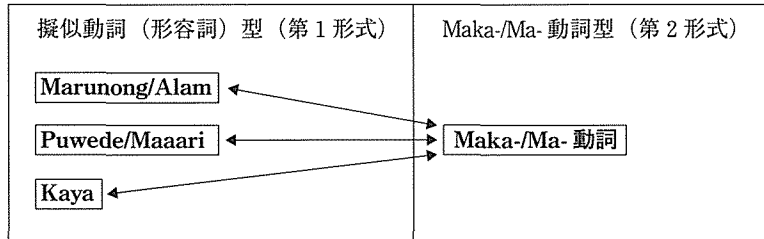
(40) *Hindi magluto si Maria.

(マリアは料理しない：不定相)

3. 本研究における新たな包括的枠組み

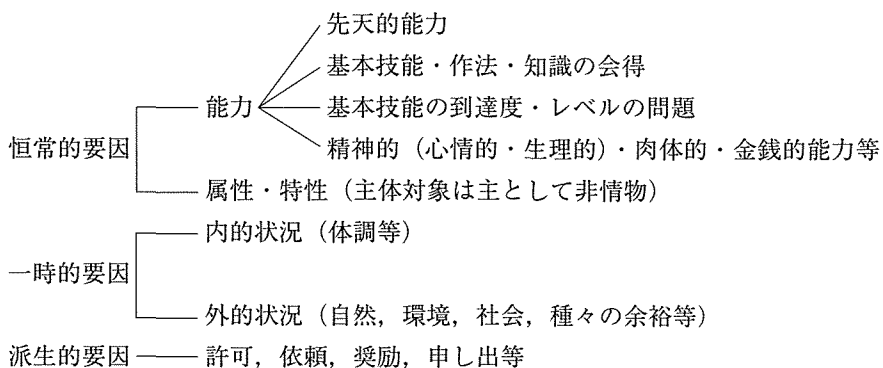
以上をまとめると本研究における新たな枠組みは、(41) の図のとおりとなる。

(41) 形式体系



なお、第1形式および第2形式が持つそれぞれの意味をもとに、ある行為が潜在的あるいは実際に実現可能となるための諸条件を、意味論的および語用論的視点に立って、まとめると、(42) のようになろう。なお、分類の上位に「恒常性・一時性」を設定したが、「恒常性・一時性」の分け方は、「能力」「属性」等が前者に、また、「状況」に関わるものが後者に属するという大まかな判断基準にもとづいている。もちろん、さらに突き詰めて考えれば、「一時的な能力」や「恒常的な状況」といった例外的なケースや「能力」と「状況」の区分が困難な融合型の例も存在するが、ここでは一般的なケースを想定している。ちなみに、ここでいう「恒常的」とは、「先天的、長引く、継続的な、反復的な」といった意味を指すものとして捉えている。

(42) 行為実現可能のための諸条件



4. 分析

4.1. 第1形式間における交替の可否

4.1.1. テスト

次に、第1形式間の交替の可否について、それぞれの意味（可能条件）に沿って考察する。

(i) 基本技能

Marunong が最も自然である。次に Kaya である。Puwede は、非文ではないが、自然さにおいて相対的に他の2つに劣る感が否めない。

(43) Marunong akong / ?Puwede akong / Kaya kong lumangoy .

（私は泳げる）

(ii) 能力の到達度・レベル

Kaya が最も適格である。Puwede も適格ではあるが、「能力」だけが基本的な要因として存在しているというふうに見ることは必ずしも適切ではなく、「状況的要因」も影響を及ぼしている場合もあるので、文脈上の判断を求められる。

(44) *Marunong akong / Kaya kong / Puwede akong lumangoy nang 1000 metro.

（私は1000メートル泳げる）

(iii) 精神的・肉体的・金銭的能力等

Puwede も Kaya も適格性という点において問題はないが、自然さにおいては、前者の方が若干劣る。

(45) Puwede kong / Kaya kong tiisin iyan dahil malakas ako.

（私は精神的に強いのでそれに絶えられる）

(46) Puwede kong / Kaya kong buhatin ito dahil malakas ako.

（私は肉体的に強いのでこれを持ち上げられる）

(47) Puwede akong / Kaya kong bumili ng bahay dahil may pera ako.

（私は財力があるので家が買える）

(iv) 属性

(48)のように、動作主体がφで、非情物が主格となる構文においては、Kaya（主として動作主体の「能力」を示す）を用いると非文になる。

(48) Puwedeng / *Kayang inumin ang tubig dito.

（この水は飲める）

(v) 状況（可能）

(49)のように、「外的状況」には基本的に Puwede を優先的に使用する。一方、(50)のように、「内的状況」の場合は、Puwede と Kaya の双方が適格となるが、後者は前者に比べやや自然さを欠く。

(49) Puwede akong / *Kaya kong umuwi dahil tumigil na ang ulan.

（雨が止んだので、私は家に帰れる）

(50) Hindi ko kayo puwedeng / kayang samahan dahil masakit ang ulo ko.

(頭が痛いので、私は君たちに同行できない)

次に、以下の「許可」「依頼」「奨励」「申し出」等の語用論的用法の場合は、少なくとも Puwede を使用する限りにおいて適格文になることがわかる。それは、これらの用法の場合、「能力」および「状況」のいずれの要因もその根底にあり、意味領域が広い Puwede ならあまり制約を受けることなく使えるからであろう。また同時に、「状況」（ときに単に内的・外的状況だけでなく、能力的状況といったものも含めて考え得る）を主たる守備範囲としている Puwede の場合、「話し手がさまざまな状況等を判断し、聞き手にある意図のもとに伝達内容を発信する」といった語用論的な意味合いや「働きかけ」を表現する上でより適しているであろう。ただし、(55)(56)のように、「能力」が関与する場合には、Kaya の方がより自然になるというケースもあろうが、その場合でも「状況」という要素はなかなか排除できないものと考えられる。

(vi) 許可 (語用論的用法)

(51) *Puwede ka nang* / **Kaya mo nang* umuwi kung gusto mo.

(もし帰りたいたなら、もうそうしてもいいよ)

(52) *Hindi ako puwedeng* / **ko kayang* uminom dahil sabi ng doktor.

(私は医者への指示で禁酒である)

(53) *Hindi puwedeng* / **kayang* manigarilyo dito.

(ここでタバコを吸ってはいけない)

(vii) 依頼 (語用論的用法)

(54) *Puwede (ko)* / **Kaya (ko)* bang hiram ang libro mo?

(その君の本借りてもいい?)

(viii) 奨励 (語用論的用法)

(55) は、主として試験に対応できる「能力」という要因が根底にあり、優位性を保っているため、Kaya の方が自然である。ただし、「外的状況」やその他の要因が優位である場合には、Puwede の方がより馴染むであろう。

(55) *Puwede kang* / *Kaya mong* kumuha ng Bar exams.

(司法試験を受けてみるといいよ)

(ix) 申し出 (語用論的用法)

(56) は、「能力」と「状況」(時間的余裕等)の融合型であり、したがって Puwede と Kaya の双方が適格になる。話者がどちらを選択するかは、文脈あるいは、「能力」および「状況」のうちいずれの要因が相対的に優位であるかによるであろう。

(56) *Puwede* / *Kaya* kitang turuan ng Ingles.

(君に英語を教えてあげてもいいよ)

4.1.2. まとめ

以上、本節の考察結果をまとめると次のとおりである。

(i)「基本技能」の場合：Marunong が適格。Kaya は、Marunong に比べて自然さの面でや

や劣る。Puwede は、非文ではないが、自然さにおいて相対的に他の2つに劣る感あり。

- (ii)「能力の達成度・レベルの問題」の場合：Kaya が主体的に使用されるが、Puwede も可能。
- (iii)「精神的・肉体的・金銭的能力等」の場合：Kaya と Puwede のいずれも可能であるが、前者がより自然。
- (iv)「属性」の場合：Puwede のみ可能。
- (v)「状況」(可能)の場合：基本的に「内的状況」は Puwede と Kaya を使用。「外的状況」は Puwede を優先的に使用。
- (vi)「語用論的用法」の場合：Puwede の使用が基本。ただし、「奨励」と「申し出」のように「能力的要因」が関与している場合には、Kaya も可能。いずれにせよ Puwede は、意味領域が広く、話し手が状況等を判断してある意図のもと聞き手に伝達内容を発信するのにより適している。

4.2. 双方の形式間における交替の可否

4.2.1. テスト

次に、上の(43)～(56)を使って、第1形式と第2形式の交替の可否について考察する。もちろん、第1形式は、アスペクト的に中立で、他方、第2形式はアスペクトが関与してくるので、この両形式は、そもそも同列には扱えないのではあるが、Maka-/Ma- 動詞による完了表現以外は、同一条件下で比較できるよう、アスペクト要素を可能な限り抜き取り、中和させた上で、その交替の可否について考察する。ちなみに、インフォーマントの2人によると、両形式のうちいずれでも表現可能な場合、いずれを選択するかは、話者の発話時の状況・場面やそれぞれの傾向・個人差もあり、一概に言えないようである。しかしながら、特に、語用論的用法の場合には、Puwede (ときに Kaya) がそれぞれ「状況」(あるいは「能力」)をより明確に示すことができるので、第1形式の方がより好まれる傾向にはあるようである。

なお、「先天的能力」については、(25abc)で触れたとおり、Maka-/Ma- 動詞をもってしか自然な表現が成立し難いので、本節では同項目はたてないことにする。

(i) 基本技能

(43')は、極めて自然な文である。

(43') Nakakalangoy ako.

(ii) 能力の到達度・レベル

(44')も同様に適格文である。

(44') Nakakalangoy ako nang 1000 metro.

(iii) 精神的・肉体的能力・金銭的能力等

(45')～(47')の用例は、いずれも適格文である。

(45') Matitiis ko iyan dahil malakas ako.

(46') Mabubuhat ko ito dahil malakas ako.

(47') Makakabili ako ng bahay dahil may pera ako.

(iv) 属性

(48') Naiinom ang tubig dito.

(48') は、適格文である。非行為者焦点接辞 Ma- を用いて表すのが一般的である。(10)(30)でも触れたように、これは、寺村 (ibid.) のいう「受動的可能」に相当するものである。「受動的可能」は、パラフレーズすれば「Puwede + 動詞不定相 (接尾辞-in) + 属格 (NG 形行為者) + 主格 (対象)」となり、対象焦点 (英語の受動態に相当する) の動詞が生じやすい。

(v) 状況 (可能)

(49') (50') のいずれも自然な文である。

(49') Makakauwi ako dahil tumigil na ang ulan.

(50') Hindi ko kayo masamahan dahil masakit ang ulo ko.

(vi) 許可 (語用論的用法)

(14) (53) では行為者が存在しないが、(53') ではこれを補わないと文として成立し難いので、加えた方が自然であるので、(ka 「あなた」/tayo 「私たち」) を挿入した上で考察した。

(51') Hindi ako makainom dahil sabi ng doktor.

(52') Makakauwi ka na kung gusto mo.

(53') Hindi (ka/tayo) nakakapanigarilyo dito

(vii) 依頼 (語用論的用法)

(54') は、若干ぞんざいな感が否めず、容認度が低い。他方、(54'') は、第 1 形式と第 2 形式の融合型で、(16) (54') より丁寧な表現である。この融合型は、他人との円滑な人間関係を維持するための戦略としての「丁寧さ」を表すいわゆる待遇表現として、日常生活でよく使われ、英語で言えば、can/could と possibly が共起する丁寧表現に相当する。なお、(54') (55') (56') の語用論的用法について、容認度が低いという結果が出ているが、それは、非意図 (不随意) 動詞と呼ばれている Maka-/Ma- 動詞の性質とも関連しているためではないか。つまり、第 2 形式は、単に潜在的な可能性なるものを陳述しているに過ぎず、「意志性」「働きかけ」なるものが欠如しているか弱いため、話し手から聞き手に対して何らかの行為を起こす際に、その意図・意志が伝わりにくいという側面を持っていると考えられる。そのため、逆に聞き手からすれば、話し手の意図や真意を推意することがより困難になってくる。また、同じ語用論的用法でも、(51') (52') ((53')) の「許可」については、第 1 形式のみならず、第 2 形式についても適格との判断が得られたのは、たまたま用例に理由や条件を具体的に示す節がそれぞれ補われており、インフォーマントが意味を理解しやすい環境が整っていたためと考えられる。さもなくば、この場合も同様に、話し手の意図が聞き手にあまり伝わらなく、あいまい性を包含したものになったのではないか。ちなみに、(54') (55') (56') について、1 人のインフォーマントは、「適格文であるが、自然でない」、一方もう 1 人は、「容認度が低い」というふうにそれぞれ答え、容認度の判断に揺れが見ら

れたが、この点について、筆者は、言語直観から後者の判断を支持することとし、以下はそれを踏まえて議論を進めていく。

(54') ?Mahihiram (ko) ba ang libro mo?

(54'') Puwede bang mahiram ang libro mo?

(viii) 奨励 (語用論的用法)

(55') は、容認度が低く、自然な表現とは言い難い。やはり、(17) (55) の方が馴染みやすい表現である。

(55') ?Makakakuha ka ng Bar exams.

(ix) 申し出 (語用論的用法)

(56') も容認度が低く、自然な表現とは言い難い。

(56') ?Matuturuan kita ng Ingles.

(x) 完了／経験

基本的に第1形式は、いわゆる「潜在系の可能」で、アスペクト的には中立であるため、完了・経験の表現形式は、 ϕ である。よって、(34) (35) のようにいわゆる「実現系の可能」の表現形式を整えるためには、第2形式の完了相を用いざるを得ない。

4.2.2 まとめ

以上の考察結果をまとめると次のとおりである。

- (i) 第1形式で表現できるものは、(54') (55') (56') の語用論的用法の表現を除き、概ね第2形式に交替可能である。第2形式の Maka-/Ma- 動詞が、「依頼」「奨励」「申し出」等の用法において「容認度が低い文」という傾向を示した。その理由は、同形式が、非意図 (不随意) 動詞と呼ばれることも関連してのことか、基本的に潜在的な可能性なるものを表しているにしか過ぎず、「意志性」「働きかけ」なるものが欠けているか弱く、話し手から聞き手に何らかの行為を起こす際に、その意図・意志が伝わりにくいという側面を持っているからであろう。つまり、Puwede のような相対的により強い「働きかけ的要素」をもっていると考えられる形式でないと、このような役割を担い切れないということではないか。
- (ii) (25abc) のとおり、「先天的能力」の場合は、第2形式を用いないと表現がぎこちなくなり、自然さを失う。
- (iii) アスペクトの関係してくる、とくに完了・経験の場合は、第2形式をとらざるを得ない。
- (iv) いずれの形式でも表現可能な場合、どちらがより好まれるかは、話者それぞれの個人差があり、一概に言い難い。
- (v) 上記の分析をもとに、可能表現の意味 (可能条件)、アスペクトおよびヴォイスの関係を整理すると (57) のようになる。なお、作業に当たっては、まず、「能力」「属性」等を恒常的要因に、「状況」を一時的要因にそれぞれ分けた上で、これらを「派生的要因」(語用論的用法) とともにいわゆる「潜在系可能」に下位分類し、一方、「完了・

経験」をいわゆる「実現系可能」のカテゴリの下に分類した。

(57) 意味（可能条件）、アスペクトおよびヴォイスの関係

	意味（可能条件）・用法	アスペクト	ヴォイス ⁵⁾	
			行為者焦点	非行為者焦点
潜在系可能	・恒常的要因（能力・属性） ・一時的要因（内的・外的状況など） ・派生的要因	不定相	Maka-	Ma-
		未完了相	Nakaka-- ⁶⁾	Na-- ⁷⁾
		未然相	Makaka-	Ma--
実現系可能	・完了・経験	完了相	Naka-	Na-

4.3. まとめ

最後に、これまで各章で行ってきた議論や考察の結果を踏まえて、各形式と意味（可能条件）の相関関係および適格度についてまとめると（58）のようになる。なお、この表にみられる個々の例から一般性を導くと、概ね次のとおりになるであろう。

- (i) 第1形式の中では、Marunong:「基本技能」、Puwede:「能力」「内的・外的状況」「派生的要因」、Kaya:「能力」が基本。Puwedeの意味領域が最も広く、次にKayaで、Marunongは「基本技能」に特化。また、「能力」と「状況」の区別が困難なものや、その融合型もあり交替の可否の判断は難しい面もあるが、文脈等からいずれの要因が相対的に優位であるか、ほぼ見当がつくのではないかと。よって、第1形式間の擬似動詞の選択には、話者間の個人差があまり見られないであろう。
- (ii) 他方、第1形式と第2形式のうちのいずれでも表現可能な場合には、第1形式間のそれに比べ、より任意的。状況や話者間の個人差・傾向により影響を受ける確率も高くなり、いずれの形式がより一般的か等については一概に言えない。しかしながら、語用論的用法になると、4.2.2.でまとめて触れたとおり、第1形式（とくにPuwede）の方が第2形式より好まれる傾向にあるようである。これに対し、「先天的能力」「一時的不能」「完了・経験」の場合は、第2形式を用いないと表現が大変ぎこちなくなる傾向がある。

(58) 各形式と意味 (可能条件) の相関関係および適格度

	意味 (可能条件)・用法	第 1 形式			第 2 形式
		Marunong	Puwede	Kaya	Maka-/Ma-
1	私は目が見えない。(先天的・恒常的不能)	×	×	×	◎
2	私は目が見えない。(一時的不能)	×	×	×	◎
3	私は泳げる。(基本技能)	◎	△	○	◎
4	私は 1000 メートル泳げる。(到達度・レベル)	×	○	◎	◎
5	私はそれに絶えられる。(精神的な能力)	×	○	◎	◎
6	私はこれが持ち上げられる。(肉体的な能力)	×	○	◎	◎
7	私は家が買える。(金銭的な能力)	×	○	◎	◎
8	この水は飲める。(属性)	×	◎	×	◎
9	雨が止んだので家に帰れる (外的状況)	×	◎	×	◎
10	頭が痛いので君たちに同行できない。(内的状況)	×	◎	○	◎
11	もし帰りたいなら。そうしてもいいよ。(許可)	×	◎	×	◎
12	ここでタバコを吸ってはいけません。(許可)	×	◎	×	◎
13	私は医者者の指示で禁酒である。(許可)	×	◎	×	◎
15	その君の本を借りてももいい？ (依頼)	×	◎	×	△
16	司法試験を受けたいいいよ。(奨励)	×	◎	◎	△
17	君に英語を教えてあげてもいいよ。(申し出)	×	◎	◎	△
18	私はその仕事をもうやり終えました。(完了)	×	×	×	◎
19	私はアメリカに行ったことがある。(経験)	×	×	×	◎

(注) ◎ = 適格文 ○ = 適格文であるが、やや不自然 △ = 容認度が低い × = 非文

5. おわりに

本稿における分析の結果は、第 4 章でまとめたとおりである。いずれにせよ、本研究では、タガログ語の可能表現の新たな枠組みを設定し、その形式・意味・用法の整理はある程度行えたのではないかと考える。そして、同形式間 (第 1 形式間) および異形式間 (第 1 形式、第 2 形式) の交替のメカニズムについても、大分明確になったのではないかと考える。また、第 2 章で考察したとおり、Maka-/Ma- 動詞を使った否定表現における「恒常性」と「一時性」のニュアンスの違いと使い分けの必要性についても確認できたものと思料する。

最後に、本研究における残された課題を挙げると次のとおりである。

- (i) 第1形式の Kaya などは、それ自身、接頭辞 Ma- が付加された動詞形（活用：不定相：makaya, 完了相：nakaya, 未完了相：nakakaya, 未然相：makakaya）も有しており、(59)のような形（Makaya（非行為者焦点動詞）+ リンカー + 動詞不定相 + 属格（NG形行為者））で表現可能である。本研究では「意味」に重きをおいたため、考察対象に含めなかったが、このような動詞が、従える動詞の性質等を観察しつつ、「アスペクト要素」や、「能力」（ときに「状況」）といった要因とどのように関わっているのかを調査してみることも可能表現についてさらに知る上で必要であろう。

(59) Nakaya kong buhatin ang mesang ito.

（私はこの机を持ち上げられた）

- (ii) 本研究の信憑性をさらに高めるためにも、筆者の作例ではなく、できるだけ多くの実例を渉猟・駆使して、人称と例文の適格性との相関関係、肯定・否定の関係、アスペクトやヴォイスとの関係、そして本稿で取り上げなかったその他の語用論的な用法等をより網羅的かつ慎重に吟味した上で、同形式間あるいは異形式間の交替等に関する操作やテストを実施する必要がある。
- (iii) なお、接頭辞 Maka-/Ma- は、「おのずと、思わず、偶然、つい、うっかり」といった「自発・非意図（不随意）」の意味をも併せ持っており、大変興味深いが、「可能」と「自発・非意図（不随意）」との関係を明らかにしないまま、これらについて論じるとは適切でないと思われるので、今回の論考においてはかかる表現を考察対象から除外した。しかしながら、このような表現についての観察は、タガログ語の可能表現とその周辺の問題をさらに明らかにしていく上で不可欠であり、今後注目していく必要があるであろう。

以上の諸点については、今後稿を改めて論じていきたい。

注

- 1) 以下、引用部分の和訳は、大上による。
- 2) Mangyari は古い用法で、現代では「可能である」というより専ら「起こる・発生する」という意味の動詞として使われることが多い。
- 3) Maalam も古い用法で、現代の日常生活では、Alam が使用される。
- 4) 内的状況は、行為者の内的な要因によって、一方、外的状況は、行為者の周囲の状況によって、それぞれ動作の実現の可否が決定されるという意味で使用している。ちなみに、Bolinger (1989) は、英語の法助動詞の意味分類に“intrinsic possibility”と“extrinsic potentiality”という用語を使用している。また、森田良行 (1988) や渋谷 (1993) は「内的条件」および「外的条件」を使用しているが、「能力」「心情」は、「内的条件」とは独立させて分類している。また、さらに、井島 (1991) では、「内因可能」「外因可能」という分類にして「能力」は、「内因可能」に含めている。
- 5) ヴォイスと一般的に呼ばれているが、タガログ語の場合、いずれの名詞句に主格（焦点）が与えられるかにより、動詞の形態が定まってくるという言語であるので、あえて焦点という用語を使って分類している。
- 6) 口語の場合、行為者焦点の未完了相および完了相の活用は、Nakakarating（着く、来る）のように

接頭辞の ka を繰り返すのが一般的であるが、他方、文語の場合は、Nakararating のように語根の最初の音節 (子音 + 母音) を繰り返す。

7) -- の印は、語根の第 1 音節の繰り返しを示している。

参考文献

- Blake, Frank R. 1925. *A Grammar of the Tagalog Language*. New Haven: American Oriental Society. Reprinted by Kraus, 1967.
- Bloomfield, Leonard. 1917. *Tagalog Texts with Grammatical Analysis*. University of Illinois Studies in Language and Literature, vol.3.
- Bolinger, D. 1989. Extrinsic Possibility and Intrinsic Potentiality: 7 on May and Can +1. *Journal of Pragmatics* 13, pp. 1-23.
- Bowen, Jean Donald (ed.). 1965. *Beginning Tagalog: A Course for Speakers of English*. Berkeley: University of California Press.
- Coates, J. 1983. *The Semantics of the Modal Auxiliaries*, London & Canberra: Croom Helm. 澤田治美 訳 1992. 『英語法助動詞の意味論』研究社
- English, L. J. 1986. *Tagalog-English Dictionary*. Manila: Capitol Publishing House.
- Ehrman, M. 1966. *The Meanings of the Modals in Present-Day American English*. The Hague: Mouton.
- 井島正博. 1991. 「可能文の多層的分析」 仁田義雄編『日本語のヴォイスと他動性』くろしお出版
- 小矢野 哲夫. 1979. 「現代日本語可能表現の意味と用法 I」大阪外国語大学学報 言語 45 大阪外国語大学
- 久野 暉. 1983. 『新日本文法研究』大修館書店
- Lopez, Cecilio. 1941. *A Manual of the Philippine National Language*. 3 rd. ed. Manila: Bureau of Printing.
- 森田 良行. 1988. 『基礎日本語辞典』角川書店
- 中野弘三. 1993. 『英語法助動詞の意味論』英潮社
- Palmer, F. R. 1974. *The English Verb*. London: Longman.
- _____. 1979. *Modality and the English Modals*. London & New York: Longman.
- _____. 1986. *Mood and Modality*. Cambridge: Cambridge University Press.
- _____. 2001. *Mood and Modality* (2nd Edition). Cambridge: Cambridge University Press.
- Ramos, Teresita. V. 1971a. *Tagalog Structures*. PALI Language Texts: Philippines. Honolulu: University of Hawaii Press.
- _____. 1971b. *Makabagong Balarila ng Pilipino*. Manila: Rex Book Store.
- _____. and Resty M. Cena. 1990. *Modern Tagalog*. Honolulu: University of Hawaii Press.
- Schachter, Paul and Fe T. Otanes. 1972. *Tagalog Reference Grammar*. Berkeley and Los Angeles: University of California Press.
- 渋谷 勝巳. 1993. 「日本語可能表現の諸相と発展」大阪大学文学部紀要 33-1 大阪大学
- Surian ng Wikang Pambansa. 1952. *Balarila ng Wikang Pambansa*. (Ikaapat na Paglilimbag). Maynila: Kawanihan ng Palimbagan.
- 寺村 秀夫. 1982. 『日本語のシンタクスと意味 I』くろしお出版

(2003. 10. 9 受理)